

Unacquainted Persons." *Language, Gender and Society*. Ed. Barrie Thorne, Cheris Kramarae and Nancy Henley. ; West, Candace and Angela Garcia. 1988. "Conversational Shift Work: A Study of Topical Traditions between Women and Men." *Social Problems* 35. 日本語については、江原由美子・好井裕明・山崎敬一「性差別のエスノメソドロジー——対面的コミュニケーション状況における権力装置」れいのるず秋葉かつえ編『おんなと日本語』有信堂高文社、1993年（初出は『現代社会学』1984年）参照。

〔参考文献〕

- Balswick, Jack. 1979. How to get your husband to say "I love you". *Family Circle*. 92. 110.
- Balswick, Jack & Christine Avertt. 1977. Differences in expressiveness: Gender, interpersonal orientation, and perceived parental expressiveness as contributing factors. *Journal of Marriage and the Family*. 38. 121-27.
- Balswick, Jack & Charles Peek. 1971. The inexpressive male: A tragedy of American society. *The Family Coordinator*. 20. 363-68.
- Farrell, Warren. 1974. *The liberated man*. New York: Random House.
- Henley, Nancy. 1977. *Body politics*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Jong, Erica. 1973. *Fear of flying*. New York: New American Library.
- Jourard, Sidney M. 1971. *Self-disclosure*. New York: Wiley-Interscience.
- Lelchuk, Alan. 1974. *American mischief*. New York: New American Library.
- Parsons, Talcott. 1951. *The social system* (Chap. VI and VII). Glencoe, Ill.: The Free Press.
- Parsons, Talcot & Robert Bales. 1955. The American family: Its relation to personality and the social structure. In *Family socialization and interaction process*. Glencoe, Ill.: The Free Press.
- Pleck, Joseph & Jack Sawyer. 1974. *Men and masculinity*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Tolson, Andrew. 1977. *The limits of masculinity*. New York: Harper & Row.

第7章

インターネット通信

—性差／性差別の構造と民主化の可能性

スーザン・C・ヘリング

民主性の主張

会話での性差・性差別を実証する研究（たとえばコーテス 1986）は今まで多くなってきたが、コンピューター・コミュニケーション（computer-mediated communication 略して CMC）[★1]での問題は、最近まであまり顧みられなかった。このことは、CMC という新しいテクノロジーに対して私たちが一般的に抱いている楽観主義——CMC は本質的に、他のどのコミュニケーション手段よりも民主的だという期待感——の風潮に多分にかかわっている。その風潮は、たとえば、哲学者や社会学者の視点——CMC により、情報へのアクセスがより平等になり、今までアクセスを許されなかつた人たちも含めて、最終的には社会全体がさらに民主化していくという見方——にも反映されている（エス 1994、ランドー 1992、ネルソン 1974）。教育関係者もまた、CMC ネットワークの可能性、たとえば、子どもたちの創造性と協力の精神を育てられることや、教師／生徒間のコミュニケーションを従来妨げていた障壁を崩すのに役立てられること、そのような CMC の可能性を示唆している（カーンとブルックシャイア 1991、キースラーとシーゲルとマクガイア 1984、マコーミックとマコーミック 1992）。フェミニストたちでさえ、CMC は、会話と違い地位や性的違いが表に出ないので、女性／男性間のコミュニケーションがより平等になるという可能性（グラドールとスワン 1989）に勇気づけられ、仲間同士の草の根的

ネットワーク作りのチャンス（スミスとバルカ 1991）に意気込んでいる。

民主的なコミュニケーションが成立するためには、コミュニケーションの手段が誰にでもアクセスできること、そして社会的地位などの制約にとらわれずにコミュニケーションできることが重要である。この二つの要素は、ドイツの哲学者ハーバーマスによって「理性の条件」として次のように定式化されている（ハーバーマス 1983, p.89、エス 1994も）。

- ① 言語能力がある者は誰もがディスコース[★2]に参加できること。
- ②(a) どんな意見・主張に対しても異議を唱えることが許されていること。
(b) どのような意見・主張も述べることが許されていること。
(c) 自分の望むこと・必要としていることを自分なりに述べることが許されていること。
- ③ ①と②に示された表現の自由・権利が、どのような圧力からも守られ、保障されていること。

ハーバーマスの第三の条件は、真に民主的なディスコースでは検閲はありえないということであり、社会的に大きな意味をもっている。コンピューター通信技術により民主化が促されるのは、これら三つの条件が満たされ、コミュニケーションの場が誰にも開かれた平等なものである限りにおいてである（エス 1994）。

CMCが民主的だと考えられている根拠の第一は、誰もが容易にコンピューターやインターネットにアクセスできるようになったこと。たしかに現在では、大学や一般の施設・機関でコンピューターを無料か無料同然で使える機会がだんだん増えてきている。コンピューター使用の長所はいろいろある。たとえば、図書館のオンライン目録や一般公開のデータベースを調べて情報を容易に入手することができる。その他、電子メールを通じ人と知り合い、フォーラムで自分の意見を述べることができるだけではなく、（政治的に影響力のある人たちも含めて）多くの人に名を知られるよ

うになるといった可能性もある。したがって、理論的には、コンピューターが使えるならば誰もが、情報の入手・交換や意思・思想の伝達の場に参加できる（できるようになる）とまで考えられる。

CMCが民主的だとされる理由の第二は、社会的制約に拘束されないインターネットの匿名性にある。グラドールとスワン（1989）やキースラーラ（1984）が指摘しているように、CMCでは自分が誰であるか相手に示さなくていいし、相手の実名・性別・現住所なども「名前」やアドレスからだけではまったくわからないことが多い[*1]。さらに、言葉の訛り・声質・筆跡・性別・体格・外見上の見かけといったものから相手の社会的地位がわかつてしまうというようなことも、インターネットの世界ではありえない。匿名のインターネットの世界では（個人が個人として認められにくいといった弊害があるにしても）、社会的地位の低い人たちが他の人たちと同等の立場でコミュニケーションできる。すなわち（名前・筆跡・声質など）コミュニケーションの見かけの部分より内容そのものが前面に出で強調されるのだ。次に引用する大学関係者のフォーラムに投書されたものを見れば、CMCに寄せる人々の熱い思い入れが感じられるはずだ。

電子メールの長所の一つは、社会・経済的なもの、人種、その他今まで情報の入手・交換に際し障害にしかならなかつたいろいろな社会的制約に縛られずにコミュニケーションすることができることだ。たとえば、これを今書いている私が、実は大学の学長なのか、ビルの清掃員なのか、または不法入国者なのか、読んでいる人にはわからないはずだ。つまり、私が誰それであるからきっとこう思っているに違いない、こういったことは言わないだろうといった偏見にとらわれずに、書かれている内容だけでコミュニケーションが成り立つ。

文法上でも、文章スタイルでも、コンピューターに関する技術的知識の面でも、大学の学長も清掃員も不法入国者でも書いたものに違いがない、ということがこの引用の論理の前提になっている。そんな前提は成り立た

ないと言ってしまえばそれまでだが、そんな揚げ足取りは抜きにして、この引用に感じられる理想主義的な思い入れはインターネット利用者によく見られるものだ。

CMCが民主的だと言われる第三の理由は、インターネット通信が比較的新しいタイプのディスコースだということで、参加者全員が同意し決定した慣例的な話しの進め方とでも言えるものがないことである（フェラーラとブランダーとウイットモア 1991、キースラー他 1984）。その結果、抑えがきかなくなり、火に油を注ぐようないわゆる「フレーミング」^[★3]などの無作法な行動も招きかねないが、一方で、他のタイプのコミュニケーションでは見られないような隠しだてのない率直な話し合いにもなりうる。こうした両刃の刃的な特徴から、ハイパー・テキスト理論派のボルター（1991）やランドー（1992）やネルソン（1974）など^[★4]は、CMCは、「無秩序」にもなりかねないが、本質的には「民主的」なものであり、従来の階級・階層的なコミュニケーションの制約からの解放を促す可能性も秘めていると述べている。

CMCの民主性に関し最後に言えることは、あからさまな通信の検閲といったものが（今のところ）あまり見られないということだ。あったとしても、それは内容の検閲というものではなく、野卑な言葉使いに関するものが典型的だ^[★2]。名目上編集されているはずのフォーラムにおいてさえ、実質的にはすべての投書が受けつけられ、送られてきた順に発表されるという傾向だ。つまり、（ハーバーマスの「理性の条件」三にあるように）誰もがフォーラムに投書でき、他の投書者に応答することができる機会を与えられているのだ。

以上四つの理由から、CMCが本質的に民主的なものだと強く主張してもよさそうに思える。しかし、こうした見方は単なる見方であって、実証されたわけではない。では、CMCの世界が実際に民主的なものだろうか。CMCは性差別解消を促しているとするグラドールとスワン（1989）の主張は実証できるのだろうか。

調査結果

今回の調査対象は、大学関係者の二つのインターネット・フォーラムでの過去1年にわたる投書のやりとりである^[★5]。一つは言語学関係のテーマを扱う LINGUIST と呼ばれるフォーラムであり、もう一つはコンピューターと読み書きのテーマを中心にしたメガバイト・ユニバーシティ（Megabyte University, MBU）と呼ばれるフォーラムだ。次に述べるのは、私自身の書いた論文3本（ヘリング 1992、1993、ヘリングとジョンソンとディベネット 1992）での詳細な分析結果をまとめたものだ。

この二つのフォーラムの調査では、三つの方法を採用した。一つは、実際の討論のやりとりを第三者の目で記録すること。具体的には、この二つのフォーラム・グループに入り、そこで1年間に交わされた討論のやりとりを集め、同時に参加者に関する情報、討論のテーマ・問題点やそれぞれの分野の参考資料などを集めた。第二の方法は、文法・スタイル上の言葉の使われ方を見るディスコース分析のやり方で、（それぞれのフォーラムでの）二つのテーマでのやりとりのテキストを分析した。この方法では、言葉の使われ方と参加者の性別とを相互関連させてみた。性別は名前から確定した。アドレスから名前がわからない場合は、フォーラムの参加者リストと照らし合わせて本名を見つけ、性別を確定した^[★3]。第三の方法は、アンケートを作成しフォーラムに送り、参加者に答えてもらうことだ。アンケートでは、討論に対する感想と参加者の性別・職業・コンピューター知識などについて聞いてみた。こうして三つの方法で集められた資料をもとに、内容に関し質的な分析ならびに数値分析も試みた。その結果、性別による違いがはっきり出た。主な違いを次に一つ一つ述べてみる。

◆参加率

フォーラムでの性別による違いで一番はっきりしているのは、投書率の違いだ。女性の構成員率は、LINGUIST では総数の36パーセント、MBU

では42パーセントで[*4]、女性の投書率はこれらの数字よりずっと低い。それぞれのフォーラムで取り上げられたテーマの一つは性差別であり、もう一つはもっと一般的で理論的なものだった。他のテーマに比べ性差別の討論は女性に人気があったが、それでも女性の投書率は（どちらのフォーラムにおいても）30パーセントにしか過ぎなかった。理論的なテーマの方では、女性の投書率はわずか16パーセントだった。それだけではなく、投書の長さにも大きな違いがあった。女性からの投書は男性に比べて短く、平均してコンピューターのスクリーン1枚分以下だった。それに対し、男性の書いたものは、平均して性差別のテーマで女性の1.5倍、理論的なテーマで女性の2倍近くも長く、中にはスクリーン10枚分からそれ以上の長さのものもあった。結論として、投書が短いことからは性別は決められないが、長い投書は決まって男性からのものと言える。

どうしてこのような性差が出るのだろうか。男性が女性の参加を阻んでいるからとは考えられない。少なくともMBUでの性差別の討論では、男性が女性に盛んに投書を勧めていた。しかし、女性に参加を思いとどまらせるような要因が、投書すること自体ではなく、投書に対する他の参加者からの反応にあるのではないか。インターネットの世界では、何人の人が同時に投書することができる。だから、討論の流れは、誰が皆の注意を引き、誰が「会話の場」を仕切るのかということに左右される。そして、誰が仕切っているかは、投書に対する返答の中で誰が誰を認め、誰が誰を無視しているかによって、すべて決まってしまう。今回分析したテキストでは、女性の投書に対する平均返答率は男性に対する返答率より低い。たとえばMBUの性差別の討論では、男性からの投書の89パーセントに対し何らかの返答があったのに比べ、女性からの投書では70パーセントしかなかった。LINGUISTの方では返答率の差はさらに開く。ここで興味深いのは、男性の投書に対する返答はなにも男性からだけというわけではなく、女性からの返答もしばしばあるということだ。女性から女性への返答率は女性から男性への返答率に比べずっと低いのだ。女性自身がフォーラム・グループでの男性の優位性を暗に認めているためだろうか。返答率だけで

はなく討論のテーマに関しても、女性は不利な立場にある。女性が提案したテーマがフォーラム全体の討論にまでなることが、男性が提案したものよりもずっと少なく、そのため女性は、自分たちが話し合いたいと思うテーマがなかなか取り上げられず、挫折感を感じることさえある。

ある特定のテーマでは、グループ全体の投書率は比較的低いにもかかわらず、女性からの投書が止まないことがある。そんなときのフォーラムでの討論は、思うようにテーマが取り上げられないとき以上に無残な結果になることがある。今回の調査期間中では、三度ばかり女性が積極的にフォーラムに参加しようとした。一度は、例のMBUでの性差別についての討論中、「男性文学」という科目を新設することの妥当性をめぐり女性と男性が対立したときだ。二度目は、ロサンジェルス暴動の発端となったロドニー・キング殴打事件に関して発言したシスター・ソールジャーについてのLINGUISTでの討論のときである。三度目は、LINGUISTでの性差別の討論で、英語のdogという言葉が魅力のない女性に対してだけ使われる差別語かどうかが討論されたときだった。3回とも、女性からの投書が徐々に増え、一日か二日のあいだ、女性からの投書率が全体の50パーセントにも達した。

こうした女性の積極的な参加に対するグループ全体からの反応は、三度ともほぼ同じものだった。まず、少数の男性から批判の投書が寄せられた。中には、グループからの脱会を示唆する脅しの投書も含まれていた。それらの投書では、いろいろな理由が挙げられていたが、女性の参加が増えたことを理由に挙げたものは一つもなかった。MBUでは、論争があまりに「野卑なのしり調だ」という批判であり[*5]、LINGUISTではテーマが「不適当」というものだった。LINGUISTでは、編集委員（男性一人、女性一人）が中に入り、シスター・ソールジャーのテーマは妥当なものだと弁護したが、その後討論そのものが、他の二つの性差別の討論の場合と同様にすたれ、投書が絶えた。もちろん、男性からの批判は、女性からの投書の増加に刺激されたものというよりは（というだけではなく）、フォーラムへの投書の内容に対するものであったと考えられなくもない。しかし、1年間の調査期間中に女性の投書率が男性の投書率なみに増加したのはこ

の3回だけであり、討論をこれ以上続けるならフォーラムから脱退するなどという脅しの投書もこの3回以外では一度もなかった。これは偶然にしてはできすぎている。さらに、スペンダーの分析（1979）を考え合わせれば、MBUとLINGUISTでの男性の反応は偶然ではない。スペンダーによると、討論中、女性からの参加率が50パーセント以上になれば必ず男性から、快く思わない、威圧されるという非難が出てくる。さらに、女性の話が全体の30パーセントしか占めていないときでさえ、男性は（男性ほどではないが女性も）女性の方がたくさんしゃべっていると感じているというのだ。こうした結果は、なにもスペンダーの分析した大学のセミナー やインターネット通信の資料に限られたものではなく、公開の場でのグループ討論一般に当てはまるものだ（ホームズ 1992）。

男性文学の討論の数ヵ月後にMBUでアンケート調査を行なった。その結果は、上で述べた私の解釈を裏づけるものであった。男性文学の討論においては、女性からの投書がたまに増えることもあったが、全体的には男性からの投書率が高いだけではなく、男性の投書に対する返答率も女性からのものを上回り、男性からのテーマが取り上げられることの方が多い、いずれにしても男性が優位を占めていた。さらに、当事者の大学で実際決まったことは、（男性文学の科目を開くことという）討論での主流意見に究極的には添ったものであった。しかし、アンケートの結果では、男性と女性の感想はまったく違っていた。男性は、討論の結果をずっと不満に感じていることが多く、「女性に負けた」とまで言っていることもよくあった。これに対し女性の方は、どちらが勝ったか負けたかなんて言えないという感想が多かった（ヘリングとジョンソンとディベネデット 1992）。はっきり言葉にして言う者は少ないが、女性の平等参加の試みを男性が快く思わなく、その結果としてフォーラムの公開討論としての機能そのものが働かなくなることも起こりうる。そんな場合、やはり女性はあまり表に出ず、少し黙っているべきだといった気持ちに誰もがさせられる。実際、女性はあまり表に出なくなる。MBUの例では、男性からの批判の投書の翌日から女性の投書率は全体の15パーセントと、いつもの率にまで下がってしまった。

た。結論として、男性の方が女性より参加率が高いのが「正常な」状態であり、開放的なはずの大学関係者のフォーラムでさえ、真の女性の平等参加が異常なものと受け取られていると言うことができる。これはずいぶん気のめいる話だ。

◆テーマの種類・選び方・好み

女性からの投書率が男性に比べて全体的に低いことは先に述べたが、ある種のテーマに関しては、具体的には、抽象的・理論的なものではなく実生活に根ざしたテーマや生活に直接影響を及ぼすようなテーマに対しては、女性は比較的積極的に討論に参加する。1993年の論文で（ヘリング 1993）、私は、ある2週間の期間中LINGUISTで扱われたテーマの選ばれ方や好みを順位づけしてみた。男性で一番多いのが論争的なもの、次に情報交換、最後に質問や個人的なものへと続く。一方女性では、個人的な話題（たとえば、言語学そのものではなく、特定の言語学者に関するようなもの）が第一であり、次に助言や質問、最後に論争的なものと情報交換へと続く。これらの好みのテーマをまとめて順に並べると、

男性	論争的 > 情報 > 質問 > 個人的
女性	個人的 > 質問 > 論争的 > 情報

となる。女性が理論的な論争点に関して投書することは他の話題に比べ比較的少ない。この傾向はMBUのフォーラムでも同じだった。

話題の選び方についての性差を別の角度から確かめてみるため、Women's Studies List (WMST) に送られてくる投書を調べてみた。このフォーラムは、女性研究の組織運営・管理に関する情報や問題点を扱っている専門的なグループだ[★6]。このフォーラム・グループ構成員の内88パーセントが女性であり、女性のための、女性同士での投書のやりとりがほとんどだ。このフォーラムでは、大学の専門家のためのフォーラムという原則にもとづいて、個人的な話題は避けられている。そのため、投書の大部分は助言

や情報を求める質問の形でなされている。そうした質問に対する返答は、(投書要項に沿って) 質問をした本人自身に個人的に送られ、本人は送られてきた返答の概要をフォーラムに送ることは許されているが、特定の論争点・問題点に関する投書は禁止されている。フォーラムは「情報源の役目を果たしている」のであって、「そうして集められた情報そのものについて話し合う場」ではないという考え方だ。投書の大半が助言や情報を求める質問の形でなされているのは、フォーラムの投書要項に単に添ったものに過ぎないと言えなくもない。しかし、助言や情報を求めるだけとして存在するフォーラムが、その構成員数を徐々に伸ばして(現在2000人近い) 活発な活動を続けているということは、助言や情報交換だけの場としてのフォーラムが、女性の性に合う、自然なものだということを裏づけている。

ここで注意したいことは、女性が助言や情報を求めるだけに満足しているのではないということだ。女性は、話し合いたいと思って選んだテーマについては、討論・論争さえ辞さないこともある。たとえば、WMSTにも論争的な投書がなされることがある。ただそんな場合、フォーラムの編集者たちにより論争的なものはかならずと言つていいほど抑えられてしまう。中にはそうした検閲じみたことに不満を感じ、「一番おもしろいテーマはほとんどかならずつぶされる」と文句を言う者も少なくない。それに対し、論争的なものを極力抑えるのは、投書の数を制限する必要からであり、また「きな臭い社会問題を討論することは、論争のための論争を求めている人たちをフォーラムに巻き込み、論争がとげとげしいものに発展すること」を恐れるからだと編集者／代表者のコーレンマンは説明している[*6]。次のセクションで示すように、コーレンマンの不安はあながち根拠のないものではない。

◆投書・討論のスタイル

今回調査・分析した大学関係者による学術的な場でのやりとりでは、性による違いがかなり明らかであり、名前を見なくても投書者が男性か女性かが言葉の使い方や文法的特徴から推察できることが多い[*7]。

表1 女言葉・男言葉の特徴

女言葉	男言葉
主張が控えめ	押しが強い
弁明的	自己宣伝的
理由づけの明確さ	仮定してかかる
質問で	修辞疑問的
私的・個人的	権威的
他への支持	他への挑戦
	ユーモア・皮肉

1992年の論文(ヘリング 1992)から、LINGUISTの討論に現れた「女言葉」「男言葉」の特徴として認められるものを要約してみると、表1のようになる。

たとえば、次に挙げる LINGUIST の投書のようなものを見れば表1のいくつかの特徴がよくわかるはずだ。

女性からの投書

ジョージ・レイコフの『女と火と危険なもの』[★7]に代表されるような内容のものは、論理的には反証しにくく、ポッパーの唱えた科学の反証可能性という立場からは科学的な理論とは言い難い[★8]という理由で、レイコフ流のものは Linguistic Society of America (アメリカ言語学会) ではあまり取り扱われていない、という X 氏の批評に私は興味をそそられました。この批評が何を意味するものなのか、X 氏にもう少し詳しく述べていただきたいのです。というのは、論証の仕方・スタイルの違いによるコミュニケーションのすれ違いは、認識科学の他の分野にもよくあることだと思うからです。さらに、人が知識を獲得していく上で、論証の仕方は一つの重要な社会的・認識論的手段であるのではないかということを私自身研究しているからでもあります。

[特徴：個人的な対応、主張の控えめさ、質問の形をとる、明確な理由づけ]

男性からの投書

科学研究において意見の一一致が見られない場合、典型的には二つのやり方しかないことは明白だ。一つは…（中略）…。しかし、どちらの方法をとるにしても、もし忠実に論理を詰めていくならば、最後には真実を究めることができることだ。つまり、どちらのやり方がまちがっているにせよ、一方がまちがっているということは、その方法論自体の自然の結論として遅かれ早かれ出てくるものなのだ。もし仮に、言語文法は他の認識能力から切り離され自立したものであるというチョムスキー理論[★9]が神聖な真実であったとしても（そのようなことは決してないことを祈っているが）、他の理論がまちがっていたことは、その理論上の結論として早晚出てくることなのだ。

[特徴：権威的な物言い、主張の押しの強さ、皮肉]

表1に掲げた性差を数値化するために、LINGUISTで長期にわたって交わされた二つの討論に寄せられた総数261通の投書を表1の特徴の有無により分析してみた。結果的には、女性の特徴として挙げたものは女性からの投書により多く現れ、男性の特徴として挙げたものは男性からの投書により多く現れている。詳しく見ると、女言葉の特徴が一つ以上含まれているものは、女性からの投書では68パーセントに上るのに対して、男性からの投書ではわずか31パーセントに過ぎなかった。男言葉の特徴しかないものは、男性からの投書では48パーセントもあるのに対して、女性からのものではわずか18パーセントしかなかった。さらに、両性の特徴が見られるものは、女性からの投書中46パーセント、男性からのもの内ではわずか14パーセントだった。つまり、男性にとっては性的に独自のスタイルを維持することが比較的容易なのに対し、女性は、大学人として受け入れられるためには男言葉を使わなければならないということと、女言葉を使わなければいやな性格、攻撃的な人と思われてしまうという二つの相反する規範に板ばさみになってしまう。

これらの調査・分析の結果から、参加の仕方にも性差があることがわ

かった。二つのフォーラムでの討論では、少数の参加者が男言葉を乱用し、他人のことも構わず自分たちだけで討論を進めるといった独占状況がしばしば起きた。そのような乱用は「敵意ある／攻撃的」修辞法と呼べるものだ。中には、むやみに知識をひけらかすものから、自分の意見を強く述べるだけのものや、意見の合わない相手を執拗にけなすものなどがある。たとえばLINGUISTでのある討論では、全体の参加者のわずか4パーセントの者が（そしてもう一つの討論では6パーセントが）攻撃的な物言いで議論を進めていた。これらの投書は、単に攻撃的であるだけではなく、語数も最も多い。一つの討論では全語数の33パーセント、もう一つでは53パーセントを占めている。これは参加者一人当たりの語数の8倍以上である。こうした投書は、討論の作法という面でも量の面でも討論を独占していた[*8]。

今回のフォーラム分析結果は、個人間の電子メールの交信にもそのまま当てはまる。マコミックら（1992）が調査の対象にしたのは、ある大学での学生間（75パーセント男性）で交わされた電子メールのやりとりだが、その分析結果はフォーラムの調査結果と一致する。マコミックらの報告によれば、コンピューター・ネットワークを「多大に」活用しているのは全体のわずか4.7パーセントの大学生であり、「電子メールの交信の大部分は彼らによるものだろう」。もちろん学生による電子メールでは、内容も目的も大学人のあいだでのフォーラムとはかなり違うが、それにしても、どちらのコミュニケーションの場においても少数の者が攻撃的なスタイルでディスコースを独占し、コンピューター・ラボが「若者文化」の実験室に変わり、粗雑な冗談や脅しやおとしめの場になってしまふ現実は変わらない。

これら少数者の行動を他の参加者がどのように思い、どのような悪影響を受けているかを調べた結果、参加者の性別による違いが明らかになった。LINGUISTでの討論の後行なったアンケート調査では、回答者全体の73パーセントの者が、敵意に満ちた論争の雰囲気に対し、いやだ、いらっしゃせられたと答えている（ヘリング 1992）。こうした気持ちとは裏腹に、

実際にどう反応すべきか、反応したかという点では、男性と女性では差があるようだった。男性では、こうした攻撃的な論争は学術的な場では普通のことだと平気なようだ。ある男性は「論争というのは、矢の飛び交う戦場のようなものであり、もちろん自分が矛先に立っているわけじゃないから、余興のようなものだ」と答えている。反対に女性は、こうした攻撃的な論争をいやがっているようで、なるべくそうした場には立ち合いたくないと答えている。女性からの感想は「いつまで続くかわからない論争には本当に嫌気がさす。フォーラムから脱会してしまおうとも思った」とか「相も変わらず同じ論議、理論闘争や繩張り争い、そして開放的なものの考え方をしようともしない、できもしない無能さにはうんざりだ。大学人一般に対する考え方方が変わりそう」というものだ。WMSTの編集者コーレンマンがフォーラムでの辛辣な論争を避けようとする気持ちは、今回のアンケート調査に寄せられた女性の感想から十分納得できるものだ。

では、どうして女性は、男性と違い攻撃的な論争に対して嫌悪を示すのだろうか。シェルドン（1992）は、幼児のころから教えられてきた性別に即したふるまい・行動の規範が原因だと示唆している。つまり、男は男で少年のときからお互いに競争・対立し合うように教育でられ、女は女で少女の時代から「いい子」であり譲歩するように教えられてきた。こうした行動規範の違いは幼児の遊びのパターンにも見られ、3歳児ですでに内面化されてしまうという。当然、敵意ある攻撃的な話し方は女性にとって男性とは違う意味合いをもってくる。男性にとってはただの会話の一部に過ぎないものを、女性は自分に対する個人的な攻撃だと取ってしまいやすいということなのだ（コーテス 1996）。

結果のまとめ・検討

今回の調査の結果は、次のようにまとめられる。CMCの民主性の可能性は未だ可能性にとどまり、女性の平等参加は実際には成り立っていない。今回調査した大学関係者のフォーラムにおいても、少数の男性が、文章量に

おいても自己宣伝的・攻撃的なレトリックの使用においてもコミュニケーションを独占しているのが現状だ。こうした状況の中で女性がもっと平等な立場で参加しようと試みても、こうした投書は、男性から無視されるか無意味なものと見なされてつぶされてしまう危険性が高い。こうした場合に、特に女性は、幼いときからの行動規範に従って、男性から無視されたり無意味なものと見なされたりすることに対し、直接衝突を避けようとし、ひいては参加意思さえ喪失しかねない。つまり、ハーバーマスの唱えるコミュニケーション民主化のための条件は未だ満たされていないのだ。たしかにインターネット通信の場合は、理論的にはコンピューターにアクセスできる者は誰も平等な立場で自由に自分が思っていること、話したいことを相手に伝えることができるはずだ。しかし、実際には、あからさまな検閲や圧力により自由平等参加がうまく成立しないようになってしまっている。民主的でありうるもの、実際には権力が支配する階級的なものになっているのが、現在のCMCの実体だ。ここで見落としてはならないことは、こうした現状は、コンピューターや通信技術が発展したことによるものではなく、インターネット通信の世界は、ただ単に現在の大学の世界を含めて社会全体に存在する階級的な男性主導のコミュニケーションのパターンがそのままインターネットの世界に焼き直しされたものに過ぎないということだ。

インターネット通信の現状は未だに民主性の理念からほど遠いものだという今回の調査結果は、CMCの民主性を唱える過去のいくつかの調査報告（グラドールとスワン 1989、キースラー他 1984）と大きく食い違っている。なぜなのか。まず第一に、CMCでは社会的地位にかかわりなくコミュニケーションができるという説だが、そうしたことが可能なのは、通信の匿名性が保証されている場合だけだ。しかし、今回の調査対象はフォーラムであり、フォーラムでの投書はメールでなされるため、誰が書いたのか、男か女かということは、メールの送り先を見ればわかることが多いし、自分の名前を書き記している投書も多いことなどから、通信の匿名性は保証されていない[*9]。性別がわからない場合には、性差別が抑制

されるはずであるが、実際には（前述したように）性別による言葉の言い回しの違いから性別がわかることが多いので、たとえすべての投書が匿名でなされていても、それで性差別がなくなるとは考えにくい。大学の学長が無意識に使う言葉の言い回しやスタイルがビルの清掃員の物言いと違うように、微妙な言い回しの違いから投書の主の社会的地位の違いや性別がわかることが多いのだ。

CMCは民主的だという見方の第二の根拠は、コンピューター通信は、ふだんのコミュニケーションと違い、遠慮のない、いい加減・無秩序とも言える利害的なコミュニケーションの場であり、それゆえ一定した話し方・話の進め方の規範が欠けているため、社会的地位の違いや性別などがわかりにくく、差別もしにくいというものだ（キースラー他 1984、ネルソン 1974）。ここで重要なことは、フォーラムなどの議論の進め方の押しの強さ・傲慢さといったものと、相手を無視した侮蔑の「フレーミング」（マコーミックとマコーミック 1992、p.381）と呼ばれるものとを区別することだ。フレーミングは、ただ感情のはけ口を求めた衝動的な行為が多い。それに対し、特に大学関係のフォーラムに見られる押しの強さ・傲慢さといったものは、周到に考え抜かれたものであり、学問上の論争では様式化されていて、当たり前で、かえっていいことだとして受け入れられている。学術的な議論での攻撃性・押しの強さがインターネットに出てくるのは、一つには、インターネット通信での書き言葉の様式・スタイルがまだ定まっていないところへ、ただ単に学会や専門誌上での議論の仕方・スタイルを CMC の世界に移してみただけのためのように思われる。

CMCの民主性の要因として挙げられることの第三は、私的・個人的なものが表に現れにくい（と信じられている）結果、比較的自由な遠慮のない開放的な雰囲気になることだ。しかしここでは、個人的な要素が表立たないという仮定が問題なのだ。フォーラムへの投書は、不特定多数の第三者に出すものと違い、相手のはっきりしたものであり、その相手は往々にして見知らぬ他人ではなく、個人的に学会などすでに知り合っている人または将来知り合う可能性のある人のことが多いということだ。こうした状

況では、自分の学者としての名声がかかっているので、開放的な雰囲気で議論することなどできにくいけれど、この点、今回の調査は、キースラーら（1984）の行なった、部屋を出ればそれっきりという一時的な解放の場でのコミュニケーションの実験結果とは異なる。キースラーら（1984, p.1129）は、匿名性、（投書の返答としてさらに投書がなされるといった連鎖状のものではない）同時性、（電子メールのような一対一ではない）会議的な同時性という三要素が、コミュニケーションのかた苦しさを和らげる度合いと相関関係にあると結論づけた。しかし、今回の私の調査対象であったフォーラムは、匿名ではなく、メールを使った連鎖的に討論が進む形式のものであり、キースラーらの挙げた三要素は当てはまらない。

最後に、民主化に不可欠な表現の自由とそれを妨げる検閲・抑圧の問題に話を戻す。LINGUIST や MBU の編集者や代表者が表現の自由を妨げるような検閲をしていないのは事実だが、女性たちにとって、表現の自由は外からも内からも抑圧されている。外からは、攻撃的なレトリックや、相手の話を無視したり無意味なものと見なしたりすることで、討論の場を独占し、ディスコースを思い通り動かしていく男性により、もっと平等な立場で参加しようと試みる女性の表現の自由は抑圧される。このことは、女性ばかりではなく、あまり攻撃的な議論をしない男性でも（女性ほどではないにしても）同様に、自由な表現の場からはじき出されていく。もちろん、そのような攻撃的な仕打ちをされたからといって黙って引き下がる必要はない。しかし、この外からの敵対性が怖いのは、生まれ育った文化のなかで子どものときから教えられてきた行動規範が、個人の内面化された制約として同時に内からも女性の表現の自由を抑圧してしまうからだ。たとえば、女性は、「あまりしゃべらないように」とか「あまり論争を招かないようなテーマで」とか「あまり強く我を通さないように」とかの内面規範によって、打たれても引き下がってしまう。最後に、（今回の調査対象ではなかったが）コンピューターは専ら男の世界だという思い込み（マコーミックとマコーミック 1991、タークル 1991）について。この思い込みは、事実上、女性にとって内からの制約として働き、女性の CMCへの参加をさ

らに妨げる要因として働いている。フォーラムの参加者へのアンケート調査の「コンピューター操作にどの程度自信があるか」という質問に対して、女性は、同年数コンピューターを使っていると答えた男性に比べ「あまり自信がない」と答えている者が大多数だったことは、コンピューターは男の世界というイメージが女性の心の中で内からの制約として息づいていることを反映するものだ[*10]。このような内からの表現の抑圧は、さらに深い社会の病根の反映であり、そうした病根を科学技術だけで癒そう、癒せられると期待するのはナイーブな考え方だ。

[原注]

- * 1 今回の調査中、電子メールのアドレスからだけでは名前や性別がわからなかった例として〈f24030@barilvm〉〈T52@dhdurz1〉〈SNU00169@krsnucl〉などがある。
- * 2 例としては、政府支援の ARPANET で交される電子メールの中で「悪趣味と思われるものを取り除く」米国防総省通信局の定期検査が挙げられる（キースラー 1984, p.1130）。
- * 3 クリスとかロビンなどの名前や外国人の名前の場合は性別がわからないので、直接本人にメールを送り、調査の目的を説明した上で聞いてみた。こうして二つのフォーラムで集めた投書の著者の約95パーセントの性別が、ほぼ確定できた。
- * 4 これらのパーセンテージは、1992年9月現在でのフォーラム・グループの構成員の内、性別が確定できたと思われるものを総数とする。
- * 5 「野卑なののしり」の調子を客観的に定義するのは難しいが、（討論を続けることに対する批判の投書は別にして）個人に対する批判を含んだものは「男性文学」科目の新設を最初に取り上げた投書だけだった。
- * 6 Joan Korenman (KORENMAN@UMBC.BITNET), Women's Studies List, June 9 11:08 PDT, 1992. 論争的なものが WMST で取り上げられたのは今回の調査中一度だけで、そのときのテーマは脳組織の性別による違いに関する研究報告に対するマスメディアの偏見についてだった。そのときは参加者全員が同意していたので論争的とは言えないかもしれない（ヘリング）。
- * 7 LINGUIST と MBU のフォーラムでは性格に違いがある。LINGUIST の方

が MBU よりも投書の表現が硬く、性別による違いが大きい。たぶんこれは、この二つのフォーラムの分野の違いによる議論の仕方の違いに起因しているのだろう。LINGUIST は言語学のテーマで、MBU は作文の創作性などのテーマでフォーラムが構成されている。言語学では、形式だった論理的な議論の仕方をするのが普通で、ずっと攻撃的、「男性的」なのにに対し、創作の世界では創造的・協力的な話の進め方で、個人的なもの、「女性的」なものだというように大きな違いがある。（たとえば、MBU への男性からの投書でも女性からのものでも、自分がどう感じているのかとか、大学を離れた世界での自分の生活といったことさえも書かれることがよくあるが、LINGUIST ではそういうことはほとんど皆無だ。）

- * 8 少数の投書者で場が独占される傾向は、MBU でも同様だ。性差別のテーマでの討論では、全投書者中わずか8パーセントの者が（一人を除いてすべて男性）全体の35パーセントの語数を費やし、それらの投書はいつもくどく長たらしく、しばしば不明瞭なものだった。MBU では特にこうしたもののが攻撃的なものより多かった。
- * 9 技術的には可能なのにもかかわらず、匿名で投書しようとした者があまりいなかったのは不思議だ。今回の調査期間中匿名で出されたものはわずか2パーセント以下であり、その2パーセントもおおむね滑稽さをねらったものだった。
- * 10 MBU では、女性の回答者の30パーセントが、男性ではわずか5パーセントがコンピューターを使うことについて「少しためらいがち」と答えている。（残りの者は「（大変）自信あり」という答えだった。）LINGUIST では、女性の回答者の13パーセントが、男性は0パーセントが「少しためらいがち」と答えている。コンピューター平均経験年数は、男女合わせ MBU では9年、LINGUIST では11年だった。

[訳注]

- ★ 1 コンピューター・コミュニケーション (computer-mediated communication 略して CMC) はコンピューター・ネットワークを通じてのコミュニケーションのこと。LAN (local area network) や WAN (wide area network) などのいろいろなタイプのネットワークのうち、国際的なインターネットが一番よく知られ使われているので、「コンピューター・コミュニケーション」と「インターネット・コミュニケーション」はほとんど同じ意味で使われている。

- ★2 ディスコース (discourse) はコミュニケーションの過程の意で使われている。
- ★3 フレーミング (framing) とは「丁寧さをまるで欠いた物言いや、相手の気持ちを無視したもの、極端な意見や人の意見をそのまま述べただけのものなど、野卑な行動一般」のこと。
- ★4 ハイパー・テキスト (hypertext) とは書かれたもの (テキスト) を超えるテキスト。一つには、図、絵、音声などと文字のテキストが (和え物のように) 一つの有機体として機能するテキストという意味。もう一つは、情報の組み立て方が、普通のテキストでは (ページからページへと) 線状的であり、(章から節へと) 階層的であるのに対し、ハイパー・テキストでは (噂のように) 情報が縦横に流れていくため、テキスト的な意味での脈絡が欠けているように見えるが、情報の流れ全体でパターンを作るもの。
- ★5 インターネットのフォーラムでは、送られてくる投書がそのフォーラム・グループ構成員全員に電子メールで送られてくる。積極的に投書せず、送られてくる投書を読むだけでも構わない。グループに参加している者だけがフォーラムに投書できるのが普通だ。いろいろなフォーラムの中には (討論のテーマ別に投書をまとめるなどの) 編集がなされているものもあり、されていないものもあり、投書要項があるフォーラムもないものもある。
- ★6 フォーラムには、送られてきた投書がグループ構成員全員に自動的に送り返されてくるものや、編集委員の手でまとめられテーマ別に分けられてからグループ構成員に送られるものなどがある。WMSTでは、創始者・編集者のコーレンマンが必要最小限の編集をしている。LINGUISTの編集はもっと細かい。
- ★7 Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- ★8 Popper, K. 1959. *The Logic of Scientific Discovery*. London: Hutchinson. 科学的な理論は反証できる可能性があるもの (つまりまちがっていると実証できる可能性があるもの) でなければならず、反証できないような理論は科学的ではない、というポッパーの科学の反証性理論。フロイドの心理学は、どの心理的現象も (またその否定も) 性的衝動として (またはその裏返しとして) 説明できるので反証のしようがなく、科学的ではないとされる。
- ★9 問題を解決する場合的一般的な思考の形式・認識力といったものと言語能力とは違う独立したものであり、言語そのものは、統語論的なもの、音韻論

的なものといったいろいろな構成体系から成り立っていて、それぞれの要素はそれぞれ独立したものであり、言語表現はそれらの構成体系・要素の組み合わせ・かかわり合いの結果で成り立つというチョムスキ一流の言語理論。

[参考文献]

-
- Bolter, J. D. 1991. *Writing Space: The Computer, Hypertext, and the History of Writing*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
 - Coates, J. 1986. *Women, Men, and Language*. New York: Longman.
 - Ess, C. 1994. "The Political Computer: Hypertext, Democracy, and Habermas," in George Landow (ed.), *Hypertext and Literary Theory*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
 - Ferrara, K., H. Brunner, and G. Whittemore. 1991. "Interactive Written Discourse as an Emergent Register." *Written Communication*. 8. 8-34.
 - Graddol, D. and J. Swann. 1989. *Gender Voices*. Oxford: Basil Blackwell.
 - Habermas, J. 1983. "Diskursethik: Notizen zu einem Begruendungsprogramm," in Moralbewusstsein und kommunikatives Handeln (Frankfurt: Suhrkamp). Translated as "Discourse Ethics: Notes on Philosophical Justification," in Christian Lenhardt and Sherry Weber Nicholsen (trans.), *Moral Consciousness and Communicative Action* (43-115). Cambridge: MIT Press. 1990.
 - Herring, S. 1992. "Gender and Participation in Computer-Mediated Linguistic Discourse," Washington, DC: ERIC Clearinghouse on Languages and Linguistics, Document no. ED345552.
 - Herring, S. 1993. "Men's Language: A Study of the Discourse of the LINGUIST List," in A. Crochetiere, J.-C. Boulanger, and C. Ouellet (eds.). *Les Langues Menaces: Actes du XVe Congres International des Linguistes*. Vol. 3. pp.347-350, Quebec Les Presses de l'Universite Laval.
 - Herring, S. (forthcoming). "Two Variants of an Electronic Message Schema," in S. Herring (ed.), *Computer-Mediated Communication: Linguistic, Social, and Cross-Cultural Perspectives*. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.
 - Herring, S., D. Johnson, and T. DiBenedetto. 1992. "Participation in Electronic Discourse in a 'Feminist' Field," in *Locating Power: Proceedings of the 1992 Berkeley Women and Language Conference*. Berkeley Linguistic Society.
 - Herring, S., D. Johnson, and T. DiBenedetto (in press). "The Discussion Is Going Too

- Far!" Male Resistance to Female Participation on the Internet." in M. Bucholtz and K. Hall (eds). *Gender Articulated: Language and the Socially-Constructed Self*. New York: Routledge.
- Homes, J. 1992. "Women's Talk in Public Contexts." *Discourse and Society*. 3 (2), 131-150.
- Kahn, A. S. and R. G. Brookshire. 1991. "Using a Computer Bulletin Board in a Social Psychology Course." *Teaching of Psychology*. 18 (4) 245-249.
- Kiesler, S., J. Siegel, and T. W. McGuire. 1984. "Social Psychological Aspects of Computer-Mediated Communication," *American Psychologist*. 39, 1123-1134.
- Landon, G. P. 1992. *Hypertext: The Convergence of Contemporary Critical Theory and Technology*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- McCormick, N. B. and J. W. McCormick. 1991. "Not for Men Only: Why So Few Women Major in Computer Science." *College Student Journal*. 85 (3) 345-350.
- McCormick, N. B. and J. W. McCormick. 1992. "Computer Friends and Foes: Content of Undergraduates' Electronic Mail," *Computers in Human Behavior*. 8, 379-405.
- Nelson, T. H. 1974. "Dream Machines: New Freedoms through Computer Screens—A Minority Report." *Computer Lib: You Can and Must Understand Computers Now*. Hugo's Book Service, Chicago. (rev. ed.) Redmond, WA, Microsoft Press, 1987.
- Sheldon, A. 1992. "Conflict Talk: Sociolinguistic Challenges to Self-Assertion and How Young Girls Meet Them." *Merrill-Palmer Quarterly*. 38 (1) 95-117.
- Smith, J. and E. Balka. 1991. "Chatting on a Feminist Computer Network," in C. Kramarae (ed.). *Technology and Women's Voices* (pp.82-97). New York: Routledge and Kegan Paul .
- Spender, D. 1979. "Languages and Sex Differences," in *Osnabrucker Beitraege zur Sprach-theorie: Sprache und Geschlecht II*, 38-59.
- Turkle, S. 1991. "Computational Reticence: Why Women Fear the Intimate Machine," in C. Kramarae (ed.). *Technology and Women's Voices*. (pp.41-61). New York: Routledge and Kegan Paul.

◆著者紹介

サリー・マコネル・ジネー (Sally McConnell-Ginet) ……第2章

コーネル大学現代言語学科（学科長）、ウーマンズ・スタディーズ・プログラム・ディレクター。 *Women and Language in Literature and Society* (1980) の編者の一人。言語と性、性差別についての論文多数 (Intonation in a Man's World, 1978; Linguistics and the Feminist Challenge, 1980; The Origins of Sexist Language in Discourse, 1984; Feminism in Linguistics, 1985; Language and Gender, 1987など)。

キャンディス・ウェスト (Candace West) ……第3章

カリフォルニア大学サンタクララ校の社会学教授。早くからエスノメソドロジカルな会話分析に入り、女性、あるいは、弱者がどのように発言を抑圧されているかを様々な場面の実証的研究によって証明してきている。論文は多数あるが、最近では相互作用の分析の大物ゴフマンをフェミニズムの視点から批判したり、社会学的言語分析に重要な貢献をしている。

ポーラ・A・トライクラー (Paula A. Treichler) ……第4章

イリノイ大学アーバナ・シャンペイン校医学部で、コミュニケーション・リサーチ、女性学を教えていた。言語と性差研究の理論的指導者として活躍してきたシェリス・クラマラエと共に著で *A Feminist Dictionary* を作った。言語と性差研究者のネットワーク誌 *Women and Language* の編集者の一人として、つねにフェミニズム言語研究の理論的先端にあって、言語と性差研究を専門的な領域にしていくための努力をしてきている。アメリカ最大の学会 Modern Language Association が支援し出版した *Language, Gender, and Professional Writing* (言語と性差研究の記念碑ともいべき論集) の編集者の一人。

エリサベス・D・クーン (Elisabeth D. Kuhn) ……第5章

ドイツの大学でジェンダーを扱った社会言語学の論文を書き、ロビン・レイコフのもとで博士論文を書いた。本書に収録した論文は、博士論文の一部を発展させたもので、応用言語学会でも同じ内容の論文が発表されている。現在 ヴァージニア・コモンウェルス大学の準教授。言語と性差研究の一連の論文著書を著している。ドイツ語、ハンガリー語、英語など、複数の言語を比較しながら、発話行為分析、語用論、ディスコース分析など最新の分析方法、フレームワークを使っ

て、様々な問題を指摘してきている。詩作も行っている。

ジャック・W・サテル (Jack W. Sattel) ……第6章

本書に収録した論文は、ノーマンデール・コミュニティ・カレッジの教員として活躍中に発表したものである。現在はミネアポリスのコミュニティ・カレッジと工科短大で教えている。1999年にはミネソタ州立大秋田校に派遣された。男性によるフェミニズムの立場をとった言語研究はアメリカでもまれである。フェミニズム言語研究の指導者ベリー・ソーンが目をつけて、彼女らの論集に載せたものである。

スーザン・C・ヘリング (Susan C. Herring) ……第7章

インディアナ大学ブルーミントン校、情報科学科教授、言語学にも関連している。1992年に、*Gender and Participation in Computer-Mediated Linguistic Discourse*という論文を発表して以来、インターネットとジェンダーの問題に焦点を絞り、ここに訳出した論文によってCMC (Computer-Mediated Communication) という研究領域を確立した。新しいテクノロジーがもたらしたさまざまな現代的問題——異文化間コミュニケーション、ボライタネス、表現の自由とプライバシー、CMCの倫理、インターネット上のセクシュアル・ハラスメントや暴力の問題など——をフェミニズムの視点から論じてきているCMC研究の第一人者である。タミール語などアジア言語も扱っている。

◆訳者紹介

灑光洋子 (なだみつ ようこ) ……第3章訳

現在 城西国際大学人文学部国際交流学科助教授
オクラホマ大学大学院博士課程修了。Ph.D.
〈主な論文〉

Similar or Different?: The Chinese Experience of Japanese Culture. (With L. Chen & G. Friedrich.) In Mary. J. Collier (ed.), *Constituting Cultural Difference Through Discourse*. (SAGE Publication, 2000)

「診察室でみられるパッドニューステリング・ストラテジーについての一考察——模擬患者演習の事例をもとに」(Speech Communication Education、17号、51-70、2004年6月)

佐竹久仁子 (さたけ くにこ) ……第4章、第6章訳

現在 大阪大学大学院博士後期課程在学中
〈主な論文〉

「国語辞書と性差別イデオロギー」(『ことば』22号、現代日本語研究会、2001年12月)

「『女ことば／男ことば』規範の形成——明治期若年者向け雑誌から」(『日本語学』23-7、明治書院、2004年6月)

熊谷滋子 (くまがい しげこ) ……第5章訳

現在 静岡大学人文学部教員
国際基督教大学大学院修士課程修了
〈主な論文〉

「ジェンダーと現実認識」(『ことば』20号、現代日本語研究会、1999年)

「ことばとステレオタイプ」(『情報問題研究』16号、情報問題研究会、2004年)